エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２２４号

2020 年 12 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三
電話　080-1232－0905
http://agape.wig.jp/encounter/

佐生健光『キリスト教と称名』より（９）

石館守三先生(1)

1901 年青森で生まれ、1996 年東京にて召天。1922 年、東大入学と同時に同志会に入寮、その時同志会会員であった小西先生を知る。小西先生は翌年、東大を卒業されるが、生涯にわたる親交を結ばれる。

1949 年、小西先生が独立伝道を開始されたとき、石館先生はご自宅を開放して集会所とされ、礼拝の場を提供された。その他、小石川白山教会の長老を辞したうえ、高円寺東教会創立のため尽力されるなど、創立から解散まで、小西先生を多方面から援助された。

私たちにとって、小西、石館両先生は高円寺東教会を支える双璧であり、石館先生なくして今日の私たちはなかったといっても過言ではなかろう。

石館守三先生(2)

私が初めて高円寺東教会に出席したのは、1952 年初夏のころと記憶しているが、その頃、礼拝は石館家の 2 階の座敷で行われていた。小西先生とは、同年正月にお目にかかっていたので、既に存じあげていたが、石館先生とお会いするのは初めてであった。お会いして、先生の、優れた体格と、どことなく迫力のある風貌に威圧感を覚えたものである。やがて先生は、プロミンやビタカンファーを創製して、多大な貢献をされた日本の薬学会の重鎮であることを知り、その思いはますます大きくなっていった。

しかし、教会で、あの大学者が私たちに別け隔てなく接していただくお姿を見るに及び、飾りなく駆使される東北弁、笑い顔のときのやさしい魅力的なまなざしに、キリスト者としての先生を認識していったのである。

先生は、月 1 回ほど教壇に立ち説教された。私の記憶では、先生の若き日からの人生経験を踏まえた、生きる目的、人生の意味に関するお話が多かったように思う。「キリストの贖いにより罪許され、永遠の命を生きるのが、人生の目的である」と、そうでなければ結局、我々は何をやっても同じなのであり、我々の人生は無意味となる。このような意味のことを、先生は訥々として説いてくださったのである。

石館守三先生（3）

初心者にとって、一つの躓きとなるものに奇跡の問題がある。科学の立場としては、奇跡などは認められない。しかし、聖書には堂々と奇跡が書かれている。奇跡中の奇跡に主の復活がある。前述のパウロの言葉をみれば、復活はキリスト教にとって、最重要事項の一つであり、キリスト教はこの土台の上に立っていることが分かる。この問題をどう考えたらよいか、求道者は悩むのである。

結局、キリスト教は科学を超越する真理であることが、認識できたとき、このことは解決できるのであるが、幸いなことに、私たちの教会には、一流の科学者であり、同時にしんしなキリスト者である石館守三先生がおられる。先生の胸中には二つの真理が矛盾なく生きているのを知るとき、論理ではなく、先生の存在そのものが、何よりもこの問題を解く証明となったのである。

先生はまた、救われた者はいかに生くべきかを率先して教えて下さった。説教の中で、先生は言われた、「私は、人並み以上の能力の持ち主ではない、秀才でもなんでもなかったのだ」と。先生の輝かしい業績は、先生が、今、目の前におかれた薬学者としてのお仕事を、全力をあげてなさった結果であると、私は信じている。

石館守三先生（4）

私は、石館先生がお話しくださった、次のようなモーク先生の逸話をよく思い出す。…モーク先生が既にアメリカの郷里に帰られた後のことである。先生に親しく教えを受けたある人が、先生を訪問された時のこと。最寄りの小さな空港を降りて、先生のお宅をお訪ねしようとしたが、飛行機の預けた手荷物が出てこない。いろいろ交渉したが、らちが開かず困惑してしまったが、まずは先生のお宅を訪問された。そして、懐かしい先生と再会のご挨拶が済んだ後、この事情を話されたところ、先生は「それでは、私が頼んでみましょう」と早速空港に出向いて、所長にお会い下さったとのこと…。

「私は日本で 40 年ほど宣教師として、伝道にたずさっわってきた者です。この人は私がいた日本の教会の兄弟で、今私を訪ねてきてくれました。ところがこの空港で、荷物がなくなって困っています。捜していただけませんか」と。所長は、先生が長い間日本で伝道された方であることを知るや否や、先生の前で直立不動の姿勢をとり、直ちに荷物の探索を約束され、その結果、離れた別の空港に送られていた手荷物が戻って来た、ということであった。物質文明国のアメリカで、尚、身を賭してキリストの教えを説くという非物質的な行為や、それを実行する人に対する心からなる尊敬が残っていることを知り、深い感銘を覚えたのである。小柄であのおやさしい先生が大男の心を動かす力をお持ちであったことを知り、さらに感銘を深めたのであった。

いま一つ

私の妻の母の出生は青森で、実家は石館先生のご実家のすぐ近くであった由。従って義母は石館先生と幼なじみの間柄であったわけである。義母は結婚して長い間台湾で暮らしていた。しかし、夫の病没を機会に子供たちと共に東京に移ったが、ある時、石館先生が高円寺東教会の長老でおられることを知り、教会にオタズネシテ感激の再開を果たされた由。それ以来、高円寺東教会に転会し、私が同教会に出席するようになった頃は、婦人会に所属し会計係として教会に奉仕していた。

酒枝義旗先生

１８９８年四国に生まれ、１９８１年東京にて召天。小西先生が高円寺東教会で伝道を開始されたころ、多くの方の協力があった。その一人が酒枝先生であった。先生は早稲田大学教授として大学では経済学を講じておられれたが、鷺の宮に集会をもち、独自に伝道活動をしておられた。しかし一時その集会を解散して高円寺東教会に合流し、小西先生に協力されたのである。

私が教会員となったころは、既に鷺の宮の集会を再開された後であったが、時折、小西先生がご病気で入院されたときなど、説教のためおいでくださった。或るとき、小西先生が「酒枝先生はいい話をなさるな、いい話だな」と独り言のようにおっしゃられたことがあった。小西先生のお話は、極めて直感的にストレートに心に迫ってくるのに対し、酒枝先生のお話は、文学的であり、私はその時の情景や人の表情までを彷彿とされるような思いに浸ったものである。…イエスが十字架にかかり給うた時のお話でも、私は目の前にその情景が浮かんでくるような気分に満たされたのであった。先生の御専門は経済学であった関係上、社会の諸問題についても大変ご関心もあり、経済を信仰の立場から解明することにも努めておられたと聞く。社会をよくすることについては、よい意味で保守的であられたように思われる。再軍備の問題なども、無鉄砲な非武装論はとられず、現実に可能な方法を持論として持っておられたようである。

酒枝義旗先生（２）

或るとき会合で段階的非武装論として、先生が趣旨のことを発言された。「その国の弱点を見つけて、侵入しようとする勢力を否定するわけにはいかない。国を守るためにはやむを得ず、武装せざるを得ない。しかし、武装しても、こちらから戦争を仕掛けることはしない。国際的にも、戦争撲滅に努め、各国が協調して段階的に武装を減らしていき、ついに戦備なき世界を創り上げる」と。すると、ある人が大声で、先生を反動主義者だと非難されたということである。普段、温厚な先生がやや気色ばんで「私の論旨を理解してもらえなかったのは残念であった」と言われたことを思い出す。

私たちは天に国籍をもつ者である（ピリピ書 3・30）その天に国籍を持つ者の、地上の生活のあり方について、イエスは幾つかの教えを下さっている。たとえば、

「カイザルの物はカイザルに、神の物は神に」（マタイ伝 22・21）

「汝等もし不義の富に忠ならずば、誰か真の富を汝らに任すべき」（ルカ伝 16・11）

「蛇の如くさとく、鴿（はと）の如く素直なれ」（マタイ伝１０．１６）。

酒枝義旗先生（３）

これらのお言葉を総合して考えたとき、私たちは、天の論理と地の論理は別ものであることを学ぶと同時に、両者は無関係でないことも学ぶのである。天の論理を地にいるものに押しつけようとしても、かえって天に歯向かう人を造ってしまうのも、また事実である。多国籍軍なるものが世界の平和のためにあるように、天に国籍のある者がボランティアとして、蛇の如くさとく鴿（はと）の如く素直に、地の平和の為に力を尽くす一つの方法を、先生がここに提示されたものと、私は信ずるのである。

先生は、大変な苦学をされて大学を卒業された由である。先生の温厚でノーブルなご容姿から、それは想像できないことであったが、先生は淡々として若い頃の思い出を交えて文学的に分かりやすくお話してくださったのであり、私は大いに励まされたのであった。

おわりに

「小西先生と称名」について書き進めていて、特に感じたことをここに述べておこう。というのは、称名とは、神に対する私たちの呼びかけであるが、実は、神の私たちに対する呼びかけへの、私たちの神に対する応答ではないであろうか。

神は私たちを救わんとして、常に呼びかけておられる。しかし、私たちはそのことに気がつかず、地にへばりついている。

> 我はわれを求めざりしものに問ひもとめられ、我をたずねざりしものに見出され我が名を呼ばざりし国にわれ言えらく、我は此にあり我はここに在りと、善からぬ道を歩み、おのが思念にしたがふおごれる民をひねもす手をのべて招けり。（イザヤ書 65・1－2）
>
> ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏の己がひなを翼のうちに集むるごとく、我なんじの子どもを集めんとせしこと幾度ぞや。されど汝らは好まざりき。（ルカ伝 13・34）
>
> その故は、神につきて知り得べきことは彼らに顕著（あらわ）なればなり、神これを顕し給へり。それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは、造られたる物により、世の創より悟りえて明らかに見るべければ、彼ら言い遁るる術なし。（ロマ書 1・19－20）

終わりに（2）

神は様々な機会をとらえて、私たちに呼びかけ、私たちをご自身のほうに引きよせて下さる。私たちは神の微かなる声を聞くことができた。そして、最後に私達がいかにして神に答えるべきか、その方法をもお教えくださった。それが「称名」である。

> 我らはいかに祈るべきかも知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成したまう。（ロマ書 8・26）
>
> また聖霊に感ぜざれば、誰も「イエスは主なり」と言う能はず。（ロマ書 12・3）

私たちが主の御名を称えることができるのは、聖霊の働きによるのであり、それを神にとりなしたまうのも聖霊である。そして、私たちは、神の国で永遠の命を生きる望みをいただいているのである。（ロマ書 12・3）

神の国はいかにして来るか

人々の努力と協力により、世界は次第によくなっていき、この地上にやがて、理想の社会が実現する。というのが人間の願いであり望である。しかし、ここでも地の思いと天の思いは異なる。聖書は次のように述べる。

兄弟よ、時と期に就きては汝らに書きおくるに及ばず。汝らは主の日の盗人の夜きたるが如くに来ることを、自ら詳細に知ればなり。人々の平和無事也というほどに、滅亡にはかに彼らの上に来たらん、はらめる女に産の苦痛の望むがごとし、必ず遁るることを得じ。（テサロニケ前書 5・2－3）

その時、その艱難ののち、日は暗く、月は光を発たず、星は空より隕ち、天にある万象ふるひ動かん。そのとき人々、人の子の大なる能力と栄光とをもて、雲に乗り来るを見ん。その時彼は使者を遣して、地の極より天の極まで、四方よりその選民をあつめん。（マルコ伝 13・24－27）

しかし、「その時」は父なる神のみ知り給い、私たちには知らされていない。私たちは主のみ名を称えつつ、目の前に置かれたることを全力をあげて為し遂げることを心がけて、「その時」を待とうではないか。